

令和5年度 椿小学校 校内研修計画

1 研究主題及び教科

研究主題	「説明的な文章」を通じた豊かな表現力を育む授業づくり
教科・領域	国語科・説明的な文章

2 主題設定の理由

(1) これまでの研修の経緯と今後の方向性

本校では、「自ら学び、力を合わせてやりぬく子どもの育成」を学校目標に掲げ、平成31年度から国語科の書くことの領域を窓口に、「意欲的に表現し、高め合う子どもの育成」に取り組んできた。書くことに苦手感がある児童に向けた効果的な手立てがすべての子どもたちにとって安心して学習に臨むことにつながるということが話し合われた。一方で、前年に改定された指導要領に沿った「主体的で対話的な深い学び」に関連した児童主体の学習はあまり見られず、教師主導の授業形態がほとんどであることが問題として浮かび上がってきた。

そこで、令和2年度から、『主体的に表現し、学び合う子どもの育成』を研究主題に設定した。本校での「学び合い」を、「学級のどの子も見捨てられない、孤立しない、全員参加の授業」と定義した。教師の一方的な知識伝達型の学習ではなく、児童の意見や疑問で授業が構成されるような児童主体をめざした。個人、ペア、グループ、全体など学習形態を変えながら、主体的に学びを深める児童の姿が見られるよう研修に取り組んだ。令和3年には、「学び合いを通して、「わかった」「できた」が実感できる授業づくり」とし、学習形態に固執するのではなく、児童自身の学びが深まる実感を大切にして、研修をすすめた。令和4年には、「聴き合い、学び合い、つながり合う子の育成」とし、児童相互の学び合いが達成するためには、「聴き合う」ことが重要だと考え、研修をすすめた。

また、全校を対象にした学校独自のアンケートの項目からも、「授業がたのしいのはどんなときか」という項目に対して、「ペアやグループで話し合っているとき」と回答した児童が多い傾向が見られることから、学び合うことの有用性が児童に浸透していることがわかる。

このように、「学び合い」を意識した授業づくりを行うことが、児童の学びに向かう意欲や主体性については向上することが研修の成果として挙げられた。一方で、児童の学力の定着については課題が見られた。学力学習状況調査の結果やみえ・スタディチェックの結果の分析から、短答式よりも記述式の問題への苦手意識が強く出ていることや問題文を適切に読み取れていないことが分かってきた。

前述した成果と課題を踏まえ、今年度の研修主題は前年度から副主題を変更し、「説明的な文章」を通じた豊かな表現力を育む授業づくり」と設定した。これまでの3年間は、教科

を絞らずに全教科で研修を進めてきた。しかし、教科の特性により、活動の目的や授業を見る視点が異なることがあり、研修での学びが深まりにくかった。そこで、「国語科」「説明的な文章」と窓口を一本化とすることで、系統性や統一感を意識して具体的に取り組むことで、児童の力を高めていきたいと考えた。国語科に設定したのは、すべての学習に必要な「言語」を学ぶ基盤となる教科であること。そして、本校の児童の弱みである「読むこと」「書くこと」を強化できると考えたからである。

これまで、本校が大切にしてきた学習者主体の「学び合い」を土台として、児童一人ひとりが様々な語彙や表現技能を身に付け、自らの考えを豊かに表現できることを期待している。

3 目指す子どもの姿

本校の教育目標にあるように「自ら学び、力を合わせてやりぬく子ども」を目指す。

「自ら学び」は主体性を、「力を合わせて」は協働性を、「やりぬく」は、学習に向かう姿勢・態度を示していると考えた。児童が進んで学習に取り組み、自己実現に向けて努力する姿を目指し教職員一丸となって研修を進めていく。

「自ら学び」(主体性)を次のように定義した。

- ・身の回りのことや学習内容に関心を持ち、意欲的に活動すること
- ・自ら課題を持ち、筋道を立てて考え、課題解決に臨むこと
- ・学習内容を着実に身につけ、様々な教科や学校行事などで生かすこと

「力を合わせて」(協働性)を次のように定義した。

- ・言語活動を通して共通点・相違点・疑問を出し合い、課題解決に向けて取り組むこと
- ・一人学びではなく、ペアやグループを用いて、協力して課題解決に取り組むこと

主題について

「豊かな表現力」を次のように定義した。

- ・自分の意見や気持ちを伝えようとする態度。
- ・自分の意見や気持ちをさまざまな語彙や表現を使って表すこと。
- ・相手の意見や気持ちを受容すること。

4. 研究仮設と研究主題の達成に向けた手立て

- ①国語科の教科書「とらえよう(読むこと)」にある項目を確実に実践することで、児童の読解力や思考力の向上につながる。

・国語科の学習の手立て

指導要領の改訂により国語科の学習（物語文・説明文）では、学習の流れが次の5つに分けられている。

- ①とらえよう：教材文の内容を読み取る
- ②ふかめよう：教材文を構造的に読み深める
- ③まとめよう：教材文の表現を使って自分で書く
- ④ひろげよう：単元で学んだことを他者と交流しあう
- ⑤いかそう：他教科や学校行事で学習内容を活用する



この5つを意識して、児童の実態に応じた単元構成を行うことでより効果的に児童に表現力を身に付けられると考える。特に、「とらえよう」には、文章の内容を読み取る重要な課題が提示されている。すべての児童が「とらえよう」を理解することができれば、文章を読む土台ができ、その後の活用的な学習にもつながっていくと考える。

②「ふかめよう」の場面で、児童に主体的・協働的な課題を設定することが、説明的な文章を構造的に、多角的に見る力を養うことができる。

教職員の研究授業では、「ふかめよう」の場面を設定し、授業構成や課題の設定について研修を深めていきたいと考える。「ふかめよう」の場面には、その教材文で児童に身に付けさせたい文章構造や表現手法などを理解する学習が設定されることが多い。以下に例を示す。

例) 4年生「アップとルーズで伝える」

単元に身につけさせたい表現 **二者の「対比」**

- ①「とらえよう」で、挿絵で使われた写真と一致する段落を見つける。
- ②「まとめよう」で、アップとルーズの内容が書かれている部分を分類、整理する。
- ③段落ごとのつながりについて考える。

アップの説明→**良い点**→**不十分な点**→**比べてわかること**

それぞれの部分での共通点や相違点などを比較する。

指導要領を参照しながら身に付けるべき資質・能力を理解し児童の実態に即した学習活動や課題を設定することが重要である。児童主体の学びを設定することで効果が上げられると考える。

その他

学習指導要領に記載される「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、必要な手立

てを以下に記述する。

・主体的な学びに向かう手立て

- ・問題設定の工夫（身近な話題を取り扱うなど）
- ・課題提示の仕方（ICT 機器の活用，具体物の活用など）
- ・発問の工夫（児童の意見から発問につなげるなど）
- ・児童から出発した課題を扱う。

・対話的に学びに向かう手立て

- ・既習事項を振り返ることができる環境づくり（掲示物，板書）
- ・自分の考えを表現するための図やグラフ，言葉など
- ・自分の考えを伝えるときの手助けとなる話型
- ・安心感のある学級づくり
- ・学習形態への明確な意図（個人・ペア・グループ・全体）※1
- ・教師の出場（必要に応じた教師の言葉がけなど）※2
- ・話し合い活動でのルールやマナーの設定

※1 昨年の研修では，ペア・グループワークは「手段」と確認された。それが「目的」になってはいけない。教師は学び合いの中でペア・グループワークを設定するには，「なんのための話し合い活動なのか。」を明確に持たなければならない。以下にその目的の例を示す。

ペア・グループワークのねらい

- ◎ 自分の考えを確かにして深める(自信)
- ◎ 他の考えに気づき，思考を広げる(助言)
- ◎ みんなで考えを練り上げる(練り上げ)
- ◎ 考えの相違点や共通点を聞き合い，思考を深める(比較)
- ◎ 考えを出し合い協働して解決する(協働)
- ◎ 新たな考えを作り上げる(新たな発想)

※2 教師の出場について

学び合いにおける教師の役割は「指揮者」「コーディネーター」である。教師は，それぞれ個性や考え方をもちた子どもたちが，授業の中で輝けるようにする必要がある。

教師の役割

- ・子どもの考えをつなぐ
- ・相違点・共通点を板書し，整理をする
- ・「なぜ」「どこからそう考えたの」と聞き返す
- ・「本当にそうか」思考をゆさぶる

5. 研修の内容について

・学年ごとの説明文の系統を明らかにする。

説明文の系統表を用いて、それぞれの学年での指導事項や重要表現（文章構成・接続詞など）を明らかにする。該当する学年だけでなく、前後の学年での学習を踏まえた指導が行えるように研修を進める。身につけていないことを復習や想起させることで、児童の読むことや書くことの力を伸長することにつながると思う。

	5・6月	9月	10・11月	1・2月	
説 明 的 な 文 章	基礎を押さえる		構成や表現の工夫をとらえる （「書くこと」との複合単元）	感想や考えを伝え合う （多様な文種・活動）	
	1	くちばし 村田浩一	よんで たしかめよう うみの かくれんぼ	せつめいする 文しよを よもう じどう車くらべ	くらべて よもう どうぶつ 赤ちゃん 増井光子
	2	じゅんじょに 気を つけて 読もう たんぼぼの ちえ 植村利夫	読んで考えたことを 話そう どうぶつ園のじゅうい 植田美弥	せつめいのしかたに 気を付けて 読み、それをいかして書こう 馬のおもちゃの作り方 宮本えつよし	だいじなことばに気を付けて読み、 分かったことを知らせよう おにごっこ 森下はるみ
	3	基礎を押さえる（2教材構成） 段落とその中心をとらえて読み、 かんそうをつたえ合おう （かんしゅ）言葉で遊ぼう 小野恭靖 こまを楽しむ 安藤正樹	生活の中で読もう ポスターを読もう	れいの書かれ方に気を付けて読み、 それをいかして書こう すがたをかえる大豆 国分敬衛	読んで感想をもち、つたえ合おう ありの行列 大滝哲也
	4	筆者の考えをとらえて、 自分の考えを発表しよう （練習）思いやりのデザイン 木村博之 アップとルーズで伝える 中谷日出	パンフレットを読もう	中心となる語や文を見つけて要約し、 調べたことを書こう 世界にはこる和紙 増田勝彦	きょうみをもったことを中心に、しょうかいしよう ウナギのなぞを追って 塚本勝巳
	5	文章の要旨をとらえ、 自分の考えを発表しよう （練習）見立てる 野口 廣 言葉の意味が分かること 今井むつみ	新聞を読もう	資料を用いた文章の効果を考え、 それをいかして書こう 固有種が教えてくれること 今泉忠明	事例と意見の関係をおさえて読み、 考えたことを伝え合おう 想像力のスイッチを入れよう 下村健一
6	筆者の主張や意図をとらえ、 自分の考えを発表しよう （練習）笑うから楽しい 中村 真 時計の時間と心の時間 一川 誠	利用案内を読もう	表現の工夫をとらえて読み、 それをいかして書こう 『鳥獣戯画』を読む 高畑 勲	筆者の考えを読み取り、 社会と生き方について話し合おう メディアと人間社会 池上 彰 大切な人と深くつながるために 瀬上尚史 [資料] プログラミングで未来を創る 石戸泰々子 卒業するみなさんへ 今、あなたに考えてほしいこと 中村桂子	

・カリキュラムマネジメント

教科ごとの連携を見直し、適切なカリキュラムマネジメントを行う。特に、総合的な学習（生活科）の課程を構成していくことが必要である。

（例）

- ・ 1年「こんなもの見つけたよ」を生活科の時間に行い、観察の時間を確保する。
- ・ 2年「たんぼぼのちえ」「かんさつ名人になろう」を生活科の単元「春さがしをしよう」を関連させることで、叙述と事象を一致させる。
- ・ 4年「調べて話そう、生活調査隊」でのアンケートを総合的な学習でとり、児童集会で発表する。

これまで、総合的な学習の目標やテーマが決まっていなかったこともあり、教師が児童につけさせたい力が不明瞭であった。そこで、それらを見直すことで教師も児童も1年間の見通しをもち、効率的、効果的に指導を進められるようになると考えている。

・めあてに正対したふりかえり作り

めあて…教師が身につけさせたいこと（ねらい）を、子どもの立場で示したもの。
まとめ…本時の学習課題に対する答え・結論
ふりかえり…子ども自身が、学びの成果や学んだこと、意欲・問題意識等を文章又は、発言にて言語化したもの。

教師は、授業を構成する際に、教師が身につけさせたい力（ゴール）の姿を考えただけで、ゴールまでの道筋（学習課題や指導言）を考えるようにする。めあては授業の終わりに、教師や子ども自身の本時における評価基準にもなりえる。そのために、初めに子どもに対して示すめあてとふりかえりの「整合性」がとれているか、めあてに「具体性」があるかどうかを吟味する必要がある。

6. 研究の基礎となる取組

学力の定着を図るために、学習の基となる平素の取組が重要になってくる。

□朝のチャレンジタイム(月・金)

- ・読書タイム
- ・読む・書くワークシート

■家庭学習の推奨

- ・音読, 漢字, 計算
- ・自主学習ノート
- ・作文や日記

□椿タイム

□図書の充実

- ・辞書の日常的活用
- ・読書の推奨
- ・調べ学習の充実

■掲示板の活用・児童作品の掲示

□平素の授業における留意点

- ・めあてとふりかえりの提示
- ・児童の思考の流れがわかる板書

■児童へのノート指導

□ICT 機器の効果的な利用

ア. 家庭学習

家庭学習の手引き(鈴峰中学校区共通)を年度初めに配布している。保護者用のみだが、子ども用(低・高)も今年度から配布予定である。家庭で学習机など、見えるところへ貼るように伝える。宿題は、音読・漢字・計算の3点セットを基本とし、週末には作文や日記、自主学習ノートなどを取り組ませている。高学年を中心にクロームブックを活用した調べ学習などを出すこともある。

イ. 自主学習

すべての学年で取り組んでいる。自主学習ノートの手引きを配布し、学年の実態に合わせて家庭学習として出している。取り組みが優れたノートは掲示をして、他の児童の意欲付けを行う。学年に応じては、学VIVAワークシートや学力調査の問題を替えて出すことで、思考力を養いたい。

ウ. ノート指導

1. ノートに必ず書かせること

- (1) 日付
- (2) 単元名(学習教材)…単元のはじめ
- (3) めあてとふりかえり(赤で罫線ではさむ)
- (4) ページ
- (5) 問題番号(教科によって)

2. ノート指導の留意点

(1) 板書の工夫

ノート指導の基本は、教師の板書である。板書と児童のノートが連動するように視覚的にわかりやすく、要点が整理された構造的な板書をするのが大切である。(別紙参照)

(2) ノートを大切に扱うことを指導する。

①文字や数字を正しく丁寧に書かせる。

※丁寧に=文字や数字をマス目に収める。

とめやはらいのある字を書く。

適切な濃さと大きさの字を書く。

②線は定規で引く。

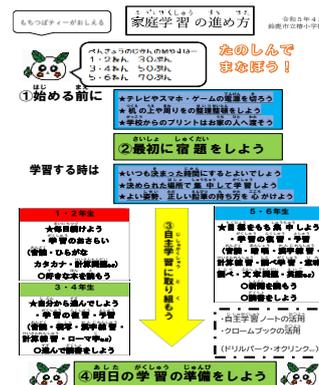
③行間を空ける。

※例) 問題と問題の間は1行・1マス空ける。

④下敷きを使う。

⑤ノートの左端に線を引いて、見やすくする。(算数・社会・理科など)

⑥落書きをしない。破らない。ノートの前から順番に使う。



⑦適切な筆記用具で書く。(赤鉛筆(赤ペン)(カラーペン赤・青・黄)

(3) ノートに書く時間を確保する。

時間が確保されていないと、ノートを雑に書いたり、教師や友達の話聞きながら書いたり学習が深まりにくい。授業の中で、ノートをまとめる時間を設け、思考を整理させる。教師が学習の中で、どこでどのようにノートを活用させるのかを考えてる必要がある。

(4) ノートの目的と機能

- ①練習 児童は、練習しながら記録をしていく。
- ②記録 児童は、記録しながら考えをまとめていく。
- ③思考 児童は、思考しながら考えをまとめていく。

学年	ノートを書く目的
低学年	文字を書く練習・記録
中学年	記録から思考への転換期
高学年	思考が中心に、構造的なノートに

(5) 各学年で扱うノートと意義について(国語科)

1～3年生：マス目ノート

4～6年生：縦罫線ノート

※それぞれ学年が上がるにつれて、マス目や罫線を増やすようにする。

エ. 掲示物

国語科をはじめとした、児童が作成した成果物を掲示し、学習への意欲につながるように掲示物を考えていく。また、学習した既習事項を掲示し、いつでも確認をできるような工夫をすることで、語彙や表現方法を増やすような掲示物を作成していく。前年度は、校内書写展や卒業式の掲示がする際に、研修に関わる掲示物が掲示されなかったこともあり、移動式掲示板や研修用の掲示スペースを確保し、通年で掲示ができるようにしたい。

①学年前の掲示板利用について

国語科や生活科で書いた作文やカードを掲示し、児童が見合う場を設ける。学年を超えて作品を鑑賞できるようにすることで、作成するときの意欲向上につながったり、他者を参考にしたりすることを期待している。

2. 教室内掲示

国語科を中心に、既習事項や児童の意見を目につくところに掲示することで、学びの足跡を残すことを意識していきたい。特に、国語で学んだ表現などは、日頃の朝のスピーチをする際に活用させたり、授業中に掲示物を確認させたりすることで、日常的に意識をさせることが大切であると考え

6. 研修日程予定 (R5)

No.	月日	内容	指導主事要請など
1	4月12日(水)	校内研修共通理解	
2	4月中旬頃()	研修計画書の確認, 示範授業研修共通理解(指導案様式等の確認)	
3	4月18日(火)	全国学力学習状況調査 6年 質問紙は4月11日(火)オンライン	
4	4月25日()	みえ・スタディチェック 4年	
5	4月27日()	みえ・スタディチェック 5年	
6	5月 日()	学調みえ・スタ分析(自校採点)	
7	6月ごろ	授業公開1	指導主事
8	7月末	夏の校内研修(国語・人権・ICT)	
9	8月 日()	教研集会	
10	10月ごろ	授業公開2	指導主事
11	11月ごろ	人権公開授業	指導主事
12	1月末ごろ	授業公開3	指導主事
13	2月はじめ	研究の成果と課題まとめ	
14	3月ごろ	年間計画の見直し・研修紀要の作成	

7. 授業公開

- ・全員が授業を公開する。全体研修会としては、指導主事が来校する3回とし、それ以外は、低学年・高学年のグループに分かれて公開する。
- ・研究グループは低学年・高学年の2ブロックとする。
- ・1週間前をめどに事前研を行う。研究グループおよび指導主事に助言を求めながら指導案を作成する。

7 事後研の方法

(全体研修会)※指導主事来校

- ・2つのグループに分ける。
- ・ICT活用の一環として、ジャムボードを使って行う。⇒自分たちが使うことによって慣れていき、授業で生かせるようにする。